



## Contents

- 口腔ピロリ菌の闇に迫る  
一万病の始まりはくちからか？
- HPVワクチンに関する最新情報
- 「いのち」についての講演会を実施して  
～令和3年度 がん教育実施報告～
- 歯と口の健康づくり講演会実施報告
- 令和3年度 がん検診セミナー開催状況報告



1位	2位	3位	4位	5位
がん	心疾患	老衰	脳血管疾患	肺炎

図1 a. 日本人死亡原因 (2019年)

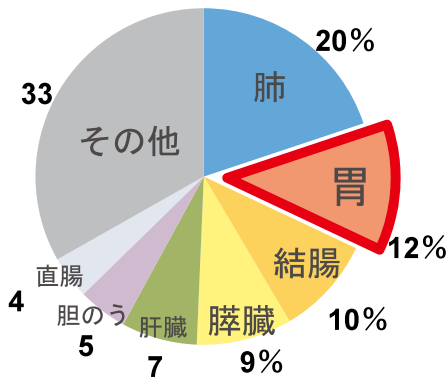


図1 b. 日本人の各種がんによる死亡割合 (%) (2019年)

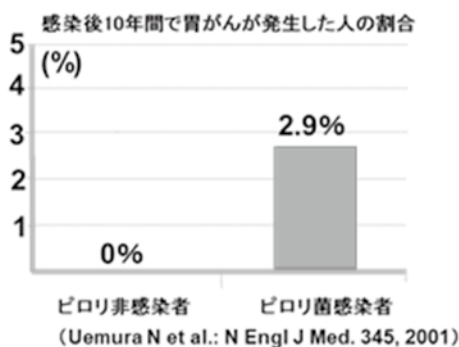


図2. ピロリ菌の感染の有無による胃がんの発生率

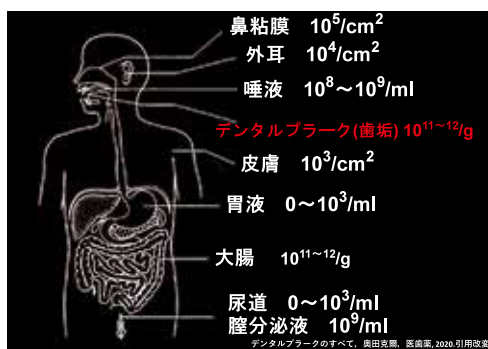


図3. 細菌が住み着く生体内の部位とその数

では同定することはできません。くちのピロリ菌の検出にはPCR法を応用した分子生物学的手法や抗原・抗体反応並びに酵素活性測定法等が応用されてきました。今風に言えば、COVID-19(コロナウイルス)の検出と類似しているという事になります。

はじめに  
がんは、日本人の死亡原因の堂々第1位であり、がんの中では肺がんがトップで、第2位が胃がん(約12%)となっています(図1a, b)。国立がん研究センター・がん情報サービス)。今から、胃がんとくちの中の細菌叢について、4つの情報を提供いたします。皆様はその先をどのように推察するでしょうか。一度考えて頂ければ幸いです。

情報①胃がん患者の胃から95%以上でピロリ菌 (*Helicobacter pylori*) が検出される等の報告より、1994年WHOはピロリ菌を胃がんの『確実な発がん因子』と認定しました(図2)。

情報②胃がん患者のくちからは、ピロリ菌が高頻度で検出されるが、くちのピロリ菌は培養が困難で、PCRによる検出率(検出率)では0~100%とばらつきがある。情報③ピロリ菌の除菌治療の成否は胃のみが評価対象で、1次除菌の成功率は60~80%、2次除菌の成功率は概ね70~90%で、デンタルプラーク(バイオフィルム)は、対象外である。

情報④くちには湿重量で $10^{11} \sim 10^{12}/g$ のデンタルバイオフィルム細菌が常在細菌叢を形成しており(図3)、細菌の増量/細菌叢の変化(病原性化)等により歯(むし歯)や歯周病が発症する。いかがでしょうか。読者の皆様ならどのようにこの先を推察するでしょうか。



口腔ピロリ菌の闇に迫る  
—万病の始まりはくちからか?  
新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔健康科学講座 歯学分野教授 野村由一郎

## 研究の背景と概要

ピロリ菌が胃を至適生息部位として感染することは周知の事実ですが、その感染経路については幼少期に①くちくち、②糞便、あるいは③上部消化管・口腔に感染し、持続感染すると推察されていますが不明な点が多いのが現状です。従来の科学的根拠をもとに、各部検体を対象にピロリ菌感染診断法が開発され、各種診断キットが販売されていますが、くちの検体を標的とした診断／検出キットはまだありません。以上の背景を踏まえ、くちをピロリ菌のリザーバー（貯蔵場所・隠れ家）と捉える斬新的な視点に立ったピロリ菌感染へのアプローチが必須と考えました。

着目したのは、通常のPCRに比べて高い特異性で目的遺伝子を増幅でき、さらに遺伝子をより多く増幅できるネステッドPCR法で、PCRを少し改良し簡便に通常のPCRの特異性を高めることができる検出方法の応用でした。

本研究は、新潟大学倫理審査委員会に申請承認後実施しました（承認番号2017-0150、2019-0220）。Single PCRは16S rRNA, *vacA* および *ureA* を標的の遺伝子とするプライマー (EHC, *Vac-A* および *UreA*) を用いました。ネステッドPCRは、EHC

Cを用いた増幅産物を鋳型としてEHCの内部領域に位置するプライマー (ET5およびEN3) を用いました<sup>(1)</sup>。Single PCR法では88口腔試料中2試料（検出率・2・3%）で陽性でしたが、応用したネステッドPCRでは32/88で陽性反応がみられ（検出率・36・4%）、さらに *H. pylori* NCTC11637株と100%の相同性を示し、応用したネステッドPCRは極めて特異性の高い検出方法でした。各部口腔試料の部位別検出結果を表1に示しました<sup>(2)</sup>。前歯部で有意に高い割合で検出され、さらに、感染歴が有る患者では、80%（12/15）の高率で検出され、感染歴無し患者の検出率27・4%（20/73）と比べ有意差を認めました<sup>(2)</sup>。年齢別では、若年層（24〜34歳）で

表1. 口腔ピロリ菌の部位別検出結果

・下顎前歯	21.6% (19/88)
・上顎前歯	19.3% (14/88)
・上顎臼歯	1.1% (1/88)
・下顎臼歯	3.4% (3/88)
・舌苔	2.3% (2/88)
・唾液	4.5% (4/88)

は21・4%（6/28）でしたが、中年層（35〜64歳）では48・3%（14/29）、高齢層（65〜91歳）では38・7%（12/31）がくちからピロリ菌が検出され、くちの常在細菌と類似した検出率を示しました<sup>(2)</sup>。  
舌苔…舌背上に付着した灰白色の偽膜用沈着物。舌苔の成分には細菌、脱落した上皮細胞、歯肉溝浸出液からの白血球等の血液成分、食物残渣などの混合物が含まれる。

## 研究の成果と今後の展開について

### 【本研究成果のポイント】

- ・本研究で開発したネステッドPCR法は、プラークバイオフィルム細菌100万菌体中に1菌体のピロリ菌が存在すれば検出可能であり、口腔ピロリ菌の高い感度で検出できると考えられた（図4）。
- ・胃にピロリ菌感染歴がある人、および早



図4. 使用したネステッドPCRの感度のシエーマ

期胃がん患者は高確率で口腔にもピロリ菌が存在した。  
・ピロリ菌が、胃と口腔を往来し、除菌治療中はくちに身を潜めている可能性があり、現在、同一被験者の胃と口腔のピロリ菌の遺伝子の相同性を検索中であり、くちがピロリ菌のリザーバーである科学的根拠を確立したいと考えている。

謝辞：本研究の一部は、科学研究費補助金（19K22704）の補助を受けて実施しました。

## 参考文献

- (1) Tomb, JF, White O, Kerlavage AR, ClaytonRA, Sutton GG, Fleischmann RD, Ketchum KA, Klenk HP, Gill S, Dougherty BA, et al. The complete genome sequence of the gastric pathogen *Helicobacter pylori*. Nature 1997, 388, 539-547.

- (2) Nagata R, Ohsumi T, Takenaka S, Noiri Y. Current Prevalence of Oral *Helicobacter pylori* among Japanese adults determined using nested polymerase chain reaction assay. Pathogen 2021, <https://dx.doi.org/10.3390/pathogens10010010>.



# HPVワクチンに関する最新情報

新潟大学医学部産科婦人科学教室

関根正幸、黒澤めぐみ、山口真奈子、  
工藤梨沙、安達聡介、榎本隆之

## はじめに

ヒトパピローマウイルス (human papillomavirus : HPV) ワクチンは2013年4月に12-16歳の女性を対象に定期接種となったが、6月には積極的勧奨が差し控えられ、接種を受ける女子が激減した<sup>(1)(2)</sup>。

その状況の中、ようやく政府は2022年4月からワクチンの積極的勧奨を再開し、その期間に接種を逃した1997年(平成9年)度から2005年(平成17年)度生まれの女子への救済として、キャッチアップ接種(通常の推奨年齢よりも高い年齢でワクチンを接種する)も同時に開始することが決定している。現在各自治体では、キャッチアップ接種対象者に個別案内を送付する準備が進んでいる。

本稿では、著者らがやっている

NIGATA STUDYのデータを中心に、HPVワクチンの効果に関して日本の研究で分かってきたことをレビューし、ようやく積極的勧奨の再開に至った現在までの経緯を解説する。

## 積極的勧奨再開までの経緯

積極的勧奨が中止されていた8年以上の間、我々は新潟市の協力を得てワクチン接種率を向上させる取り組みを行ってきた。しかし、一旦激減した接種率はなかなか上昇せず、2000年(平成12年)度生まれ以降の女性は、ほとんどワクチンの接種を受けていない。その間世界では、国家プロジェクトとしてHPVワクチン接種が多くの国で推進され、現在は110カ国以上で接種が行われている。ワクチン接種による

HPV感染率の低下、前がん病変発症率の低下に加えて、浸潤子宮頸がんの罹患率減少が2020年にスウェーデンから、次いでデンマークとイングランドからも報告されている<sup>(3)(5)</sup>。スウェーデンの報告によると(Lei et al. 2020)、17歳未満でのワクチン接種により浸潤子宮頸がん発症率が88%減少し、キャッチアップ接種として17-30歳で接種を受けた女性でも53%の減少効果を認めている。本邦では、まだ浸潤がんの予防効果に関する報告はないものの、HPV感染率や前がん病変発症率の低下は相次いで報告されている<sup>(6)(14)</sup>。

我々が新潟県で行っているNIGATA STUDYは、研究登録者に、初回性交年齢、性交経験人数、HPVワクチンの接種歴について確認し、ワクチン接種歴は自己申告に

加えて、自治体の接種記録からワクチン接種の有無、種類、接種日と接種回数を確認し、より正確な情報を得て解析を行っている。これまでに、性的活動性(初回性交年齢、性交経験人数)の因子も加えたHPV2価ワクチン接種による正確なワクチン有効性を算出し報告した<sup>(6)(15)</sup>。20-22歳のHPV2価ワクチン接種者1355人(74.6%)と非接種者459人(25.4%)のうち、ワクチン接種者ではHPV16/18型感染率が0.2%であったのに対し、非接種者の感染率は2.2%でHPV16/18型に対するワクチンの有効性は91.9%( $p<0.01$ )と非常に高かった。さらに初交前にワクチンを接種した登録者に解析対象を限定すると、HPV16/18型に対する有効率は93.9%( $p<0.01$ )に上昇し、さらにHPV31/45/52型に対する有効性は67.7%( $p<0.01$ )と交差防御(クロスプロテクション)効果を認めていることもわかった。このHPV16/18/31/45/52型に対する効果を考慮すると、日本人において子宮頸がんの80%以上に関与するHPV型をカバーできる。

大阪大学が中心に行っているJ studyでは、2013年4月

2017年3月に子宮がん検診を受診した20-24歳の女性を対象とし、2482人の症例（細胞診異常）と12296人の対照（細胞診正常）のデータを解析している<sup>63)</sup>。細胞診異常、CIN1+、CIN2+、CIN3+のワクチン接種なしと比較したHPVワクチン接種のORはそれぞれ0.42（0.34-0.50）、0.42（0.31-0.58）、0.25（0.12-0.54）、0.19（0.03-1.15）で、ワクチン有効率はそれぞれ、58.5%、57.9%、74.8%、80.9%であった（CIN3+は症例数が少なく有意差なし）。現在CIN3+の解析に向けて、症例登録が継続されている。NIGATA STUDYでは、20-26歳の女性を対象に細胞診異常に対する効果の解析を行い、HSIL+の有意な減少効果を認め、初交前接種群ではHPV16/18型関連のHSIL+を認めていなかった（論文投稿中）。

以上のような科学的データが議論され、厚生労働省は2021年8月にHPVワクチンに関する審議を再開することを決定し、10月から副反応検討部会での審議が開始された。そしてようやく11月26日に、2022年4月から積極的勧奨を再開することが決定された。

### 積極的勧奨中止の影響

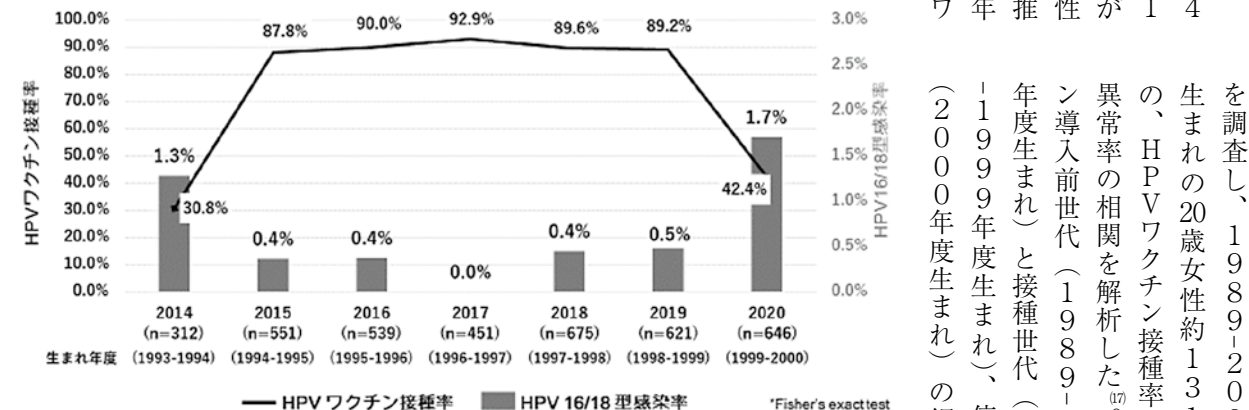


図1 新潟市20-21歳のHPV16/18型感染率の年次推移：積極的勧奨中止の影響で感染率が再上昇している（文献16より作図）

を調査し、1989-2000年度生まれの20歳女性約1315万人の、HPVワクチン接種率と細胞診異常率の相関を解析した<sup>67)</sup>。ワクチン導入前世代（1989-1993年度生まれ）と接種世代（1994-1999年度生まれ）、停止世代（2000年度生まれ）の細胞診異常率の推移をみると、積極的勧奨が中止されたワクチン停止世代ではASC-US以上の細胞診異常率が5.0%に上昇し、ワクチンが導入されなかったとして計算された予測値に近似していることが分かった。以上のように積極的勧奨中止の影響で、現実にHPV16/18型感染率の再上昇がみられ、ASC-US以上の細胞診異常率も上昇しているという、我が国の懸念すべき状況が明らかになっている。

### ワクチン有効性の持続期間

海外で最も長期の効果を報告しているのは、2020年に発表されたFUTUREII試験の最終解析結果である<sup>68)</sup>。北欧4カ国で4価ワクチンを接種した16-23歳女性を対象にした研究で、HPV16/18型に関連した前がん病変はワクチン接種群では認められず、有効率は100%であり、少なくとも12年間、最長で14年間の効果持続が認められている。一方で、これまで日本人を対象にワクチンの持続期間を検証した報告は皆無であった。そこでNIGATA STUDYでは、2019年度に新潟市の子宮がん検診を受診した25-26歳（公費接種開始時に接種対象年齢

であった1994年生まれの女性と、公費接種開始前世代の1993年生まれの女性)を対象に、2価ワクチン接種から約9年経過した時点でのワクチンのHPV16/18型感染に対する長期効果の解析を行った<sup>(7)</sup>。解析対象は429人でアンケートによるワクチン接種歴と性的活動性(初回性交年齢、性交経験人数)の確認、自治体のワクチン接種記録の確認を行った。ワクチン接種者150人(35.0%)と非接種者279人(65.0%)を比較し、ワクチン接種からHPV検査までの平均期間は102.7ヶ月(8.6年)、中央値は103ヶ月(92.109ヶ月)であった。ワクチン非接種者ではHPV16/18型感染率が5.4%(15/279)であったのに対し、接種者の感染率は0%(0/150)と有意に低く( $p=0.0018$ )、HPV16/18型感染に対するワクチンの有効性は100%であった。また、HPV31/45/52型の感染率はワクチン非接種者では10.0%(28/279)で

あったのに対し、ワクチン接種群は3.3%(5/150)と有意に低く( $p=0.013$ )、有効率は69.0%であり交差防御効果に関しても長期効果が示された(図2)。積極的勧奨が中止されていたHPVワクチンであるが、12~16歳で公費接種を受けた女性は、20代中盤の性的活動期で

あったのに対し、ワクチン接種群は3.3%(5/150)と有意に低く( $p=0.013$ )、有効率は69.0%であり交差防御効果に関しても長期効果が示された(図2)。積極的勧奨が中止されていたHPVワクチンであるが、12~16歳で公費接種を受けた女性は、20代中盤の性的活動期で

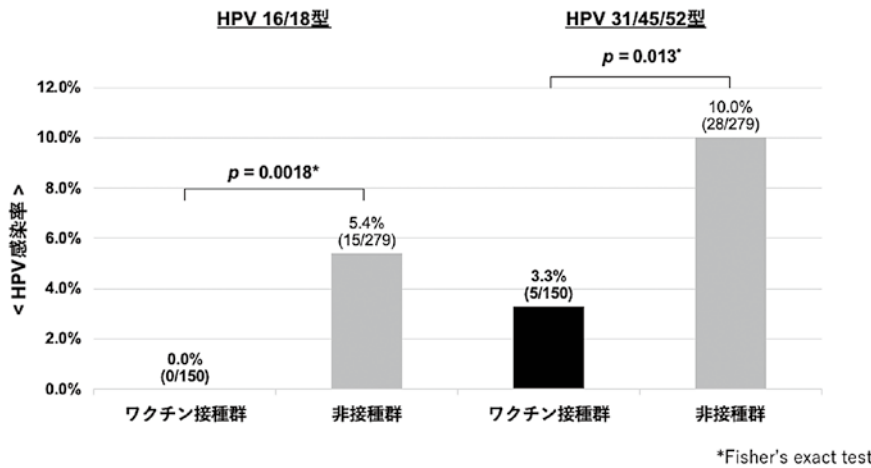


図2 HPVワクチンの長期効果：接種から約9年後の25-26歳でもHPV16/18型、31/45/52型の感染予防効果が持続している(文献7より作図)

も長期的な効果享受できていることが示された。

### おわりに

HPVワクチンの導入により、世界は確実に子宮頸がんの排除に向かっている<sup>(8)</sup>。積極的勧奨が再開された日本では、12~16歳の定期接種と同時に17歳以上のキャッチアップ接種率の向上も重要課題である。国家的にキャッチアップ接種の導入に成功している国々でも、定期接種に比べてキャッチアップ接種率は低いことが報告されている。

キャッチアップ接種の対象になる女性に対しては、現在の住所がある自治体から、接種の案内が個別に配布される。その案内で問題になるのは、日本には国家的データベースがなく、ワクチンの接種歴は当時公費接種を行った約1700の自治体がそれぞれ個別に管理していることである。中学生や高校生の時にHPVワクチンの公費接種を受けた女性が、大学進学や就職、結婚により住所が変わった場合、その女性のワクチン接種歴を、データベースから把握することができない。ワクチンの接種に関する本人の記憶が確かであれば、4回以上のワクチン接種を受

ける事態を防ぐことができるが、当時から中高生であった女子の記憶が曖昧であることは我々の先行研究でも明らかになっている<sup>(9)</sup>。

我々は今後も大規模疫学研究を継続し、キャッチアップ接種の効果も含めて科学的データを発信し続ける予定である。加えて、医師会や内科医会、小児科医会の先生方、新潟県の各自治体、教育委員会等とも協力関係を継続し、地域の方々への啓蒙にも目を向けた活動を展開していきたいと考えている。

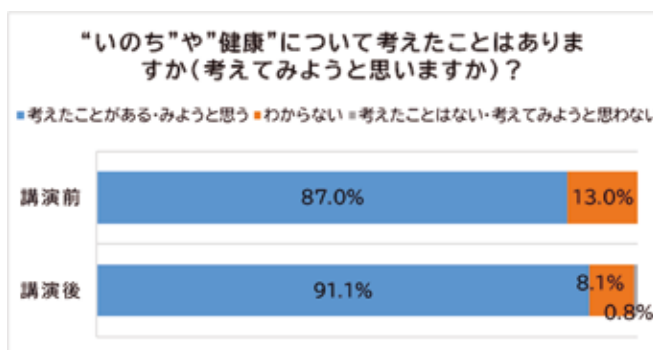
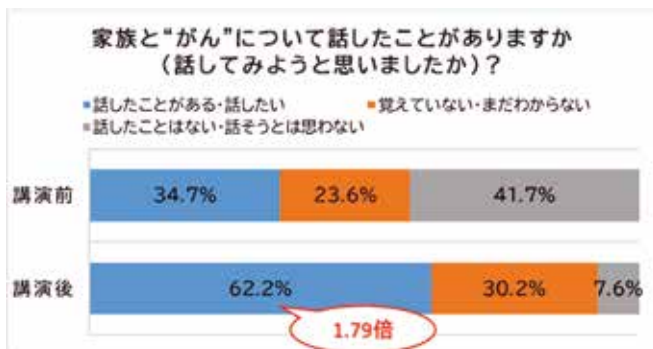
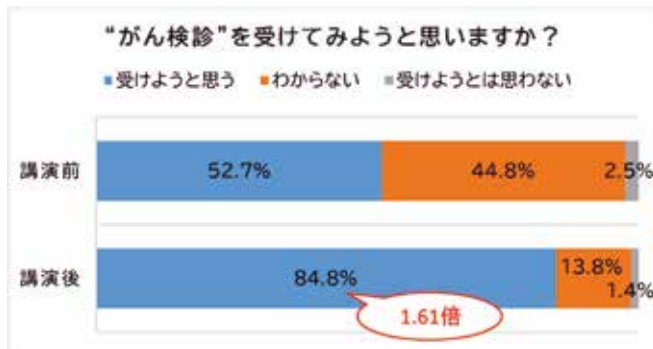
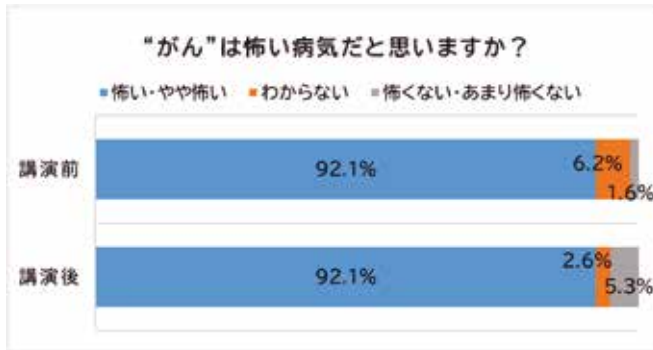
- (1) Sekine M, Kudo R, Adachi S, et al: Japanese Crisis of HPV Vaccination. Int J Pathol Clin Res. 2016; 2(2):2469-5807.
- (2) Sekine M, Kudo R, Yamaguchi M, et al: Japan's Ongoing Crisis on HPV Vaccination. Vaccines. 2020; 8(3).
- (3) Lei J, Pioner A, Elstrom KM, et al: HPV Vaccination and the Risk of Invasive Cervical Cancer. N Engl J Med. 2020; 383: 1340-1348.
- (4) Kiaer SK, Dehlendorf C, Belmonte F, et al: Real-World Effectiveness of Human Papillomavirus Vaccination Against Cervical Cancer. J Natl Cancer Inst. 2021; 113: 1329-1335.

- ⑤ Falcaro M, Castanon A, Ndlela B, et al: The effects of the national HPV vaccination programme in England, UK, on cervical cancer and grade 3 cervical intraepithelial neoplasia incidence: a register-based observational study. *Lancet* 2021; 398: 2084-2092.
- ⑥ Kudo R, Yamaguchi M, Sekine M, et al: Bivalent Human Papillomavirus Vaccine Effectiveness in a Japanese Population: High Vaccine-Type-Specific Effectiveness and Evidence of Cross-Protection. *J Infect Dis* 2019; 219: 382-390.
- ⑦ Kurosawa M, Sekine M, Yamaguchi, et al: Long-term effectiveness of HPV vaccination against HPV infection in young Japanese women: real-world data. *Cancer sci.* 2022. doi: 10.1111/cas.15282.
- ⑧ Matsumoto K, Yaegashi N, Iwata T, et al: Reduction in HPV16/18 prevalence among young women with high-grade cervical lesions following the Japanese HPV vaccination program. *Cancer Sci* 2019; 110: 3811-3820.
- ⑨ Karube A, Saito F, Nakamura E, et al: Reduction in HPV 16/18 prevalence among young women following HPV vaccine introduction in a highly vaccinated district. *Japan. J Rural Med* 2019; 14:48-57.
- ⑩ Tanaka H, Shirasawa H, Shimizu D, et al: Preventive effect of human papillomavirus vaccination on the development of uterine cervical lesions in young Japanese women. *J Obstet Gynaecol Res* 2017; 43:1597-1601.
- ⑪ Shiko Y, Konno R, Konishi H, et al: Effectiveness of HPV vaccination against the development of high-grade cervical lesions in young Japanese women. *BMC Infect Dis* 2020; 20: 808.
- ⑫ Ueda Y, Yagi A, Nakayama T, et al: Dynamic changes in Japan's prevalence of abnormal findings in cervical cervical cytology depending on birth year. *Sci Rep* 2018; 8: 5612.
- ⑬ Ikeda S, Ueda Y, Hara M, et al: Human papillomavirus vaccine to prevent cervical intraepithelial neoplasia in Japan: A nationwide case-control study. *Cancer Sci* 2020; 112: 839-846.
- ⑭ Yagi A, Ueda Y, Ikeda S, et al: Evaluation of future cervical cancer risk in Japan, based on birth year. *Vaccine* 2019; 37:2889-2891
- ⑮ Sekine M, Yamaguchi M, Kudo R, et al: Epidemiologic Profile of Type-Specific Human Papillomavirus Infection after Initiation of HPV Vaccination. *Vaccines*. 2020; 8 (3) .
- ⑯ Sekine M, Yamaguchi M, Kudo R, et al: Suspension of proactive recommendations for HPV vaccination has led to a significant increase in HPV infection rates in young Japanese women: real-world data. *Lancet Reg Health West Pac.* 2021 Oct 21. doi: 10.1016/j.lanwpc.2021.100300
- ⑰ Yagi A, Ueda Y, Ikeda S, et al: The looming health hazard: A wave of HPV-related cancers in Japan is becoming a reality due to the continued suspension of the governmental recommendation of HPV vaccine. *Lancet Reg Health West Pac.* 2021 Dec 13. doi: 10.1016/j.lanwpc.2021.100327
- ⑱ Kiaer SK, Nygård M, Sundström K, et al: Final analysis of a 14-year long-term follow-up study of the effectiveness and immunogenicity of the quadrivalent human papillomavirus vaccine in women from four nordic countries. *EJ Clinical Medicine* 2020;23:100401. DOI: 10.1016/j.eclim.2020.100401.
- ⑲ Kurosawa M, Sekine M, Yamaguchi M, et al: Long-Term Effects of Human Papillomavirus Vaccination in Clinical Trials and Real-World Data: A Systematic Review. *Vaccines* (Basel) 2022;10 (2) . DOI: 10.3390/vaccines10020256.
- ⑳ Simms KT, Steinberg J, Caruana M, et al: Impact of scaled up human papillomavirus vaccination and cervical screening and the potential for global elimination of cervical cancer in 181 countries, 2020-99: a modelling study. *Lancet Oncol* 2019;20 (3) :394-407. DOI: 10.1016/S1470-2045 (18) 30836-2.
- ㉑ Yamaguchi M, Sekine M, Kudo R, et al: Differential misclassification between self-reported status and official HPV vaccination records in Japan: Implications for evaluating vaccine safety and effectiveness. *Papillomavirus research* 2018; 6: 6-10.



# 令和3年度 がん教育実施アンケート結果

有効回答数：1706人



## 「いのち」についての講演会を実施して 令和3年度 がん教育実施報告

本財団では平成26年度より、中学生に対するがん教育の一環として、県内の中学校を対象に、医師から「がんについての基礎知識」、「早期発見・早期治療の重要性」、「検診受診

の重要性」等についての講演会を実施しています。令和3年度は9市12校の中学校で実施しました。今回は、講演を聴講する前後で、中学生にどのような意識の変化が見

られたかというアンケート集計結果を紹介いたします。集計結果から、「がんは早い段階で見つけると治る確率が高いと思いますか」の質問について「思う」が

1・20倍、「将来、がん検診を受けてみようと思いませんか」の質問に「受けようと思う」が1・61倍、「家族とがんについて話したことがありますか(話してみようと思いませんか)」の質問に「話したい」が1・79倍となり、本講演会の目的を達成できていると考えております。



# 歯と口の健康づくり講演会実施報告

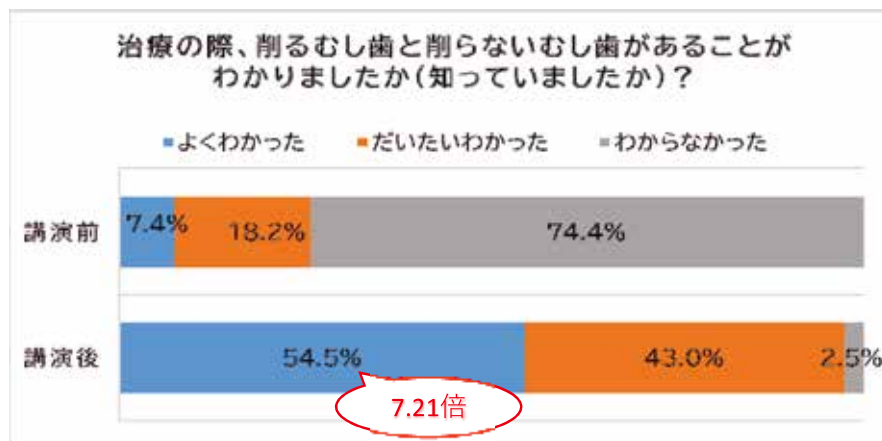
本財団では、令和2年度から中学生に対し、将来の歯周病等による全身疾患の発症リスクを鑑み、歯や口の健康づくりの正しい知識を啓発するために、新潟大学大学院歯学総合研究所 口腔健康科学講座 齋藤由一郎先生に講師をお願いし、「歯と口の健康づくり講演会」を開催しております。

今回は、講演を聴講する前後で、中学生にどのような意識の変化が見られたかというアンケート集計結果を紹介いたします。

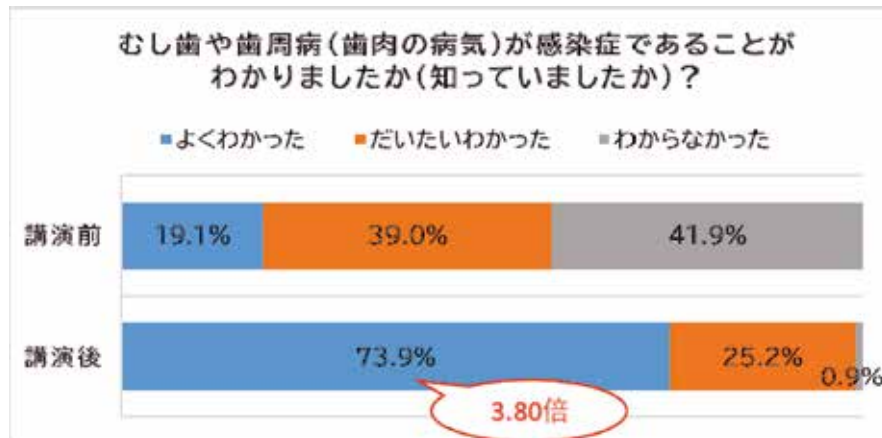
集計結果から、「治療の際、削るむし歯と削らないむし歯があることがわかりましたか」の質問によくわ

## 令和3年度 歯と口の健康づくり講演会実施アンケート結果

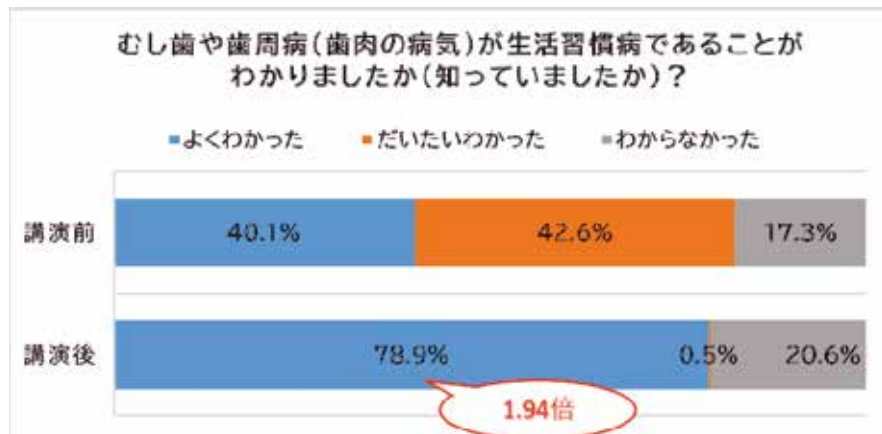
有効回答数：437人



かったという回答の割合が7.21倍、「むし歯や歯周病(歯肉の病気)



が感染症であることがわかりましたか」の質問によくわかったという回



答の割合が3.80倍、「むし歯や歯周病(歯肉の病気)が生活習慣病であることわかりましたか」の質問によくわかったという回答の割合が1.94倍となり、本講演会の目的を達成できていると考えております。

## 令和3年度 がん検診セミナー開催報告

新潟県の委託事業として毎年開催している「がん検診セミナー」について、今年度は「乳がん検診セミナー」と「子宮がん検診セミナー」を開催し、医師をはじめ保健師、臨床検査技師、市町村のがん検診関係者から多数参加いただきました。その概要についてご紹介します。

### 《乳がん検診セミナー》

令和4年3月9日（水）にWEBでライブ配信し、約70名から参加いただきました。

講演Ⅰでは「乳がん検診と新型コロナウイルス感染症への対応について」と題し、新潟県労働衛生医学協会 診療放射線技師 山崎 薫 様から、講演Ⅱでは「乳がん検診最近のトピックス-プレスト・アウェアネス・J-START第二報-」と題し、済生会新潟病院 乳腺外科部長 田邊 匡 先生に、それぞれご講演をいただきました。

山崎様からは、令和3年10月に一部改正された「がん予防重点健康教育及び、がん検診実施のための指針（以下、指針）」の乳がん検診に係る部分やマンモグラフィにおける新型コロナウイルス感染症への対応について、日本乳癌検診学会の「乳がん検診にあたっての新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への手引き」より受診者や検診従事者が考慮すべき点や検診時の感染防護策などについてお話いただきました。

田邊先生には、乳がん検診の最近のトピックスとして、40歳代の乳がん検診における超音波検診追加の意義を検証するランダム化大規模比較試験（J-START）の第一報および第二報や指針の改正で「自己触診」が「プレスト・アウェアネス」に変更となったことを受けて、プレスト・アウェアネスについてもお話いただきました。J-STARTの第二報では、40歳代では乳房の構成に関わらず、マンモグラフィ、超音波検診とも、単独では偽陰性が多く、十分な感度が得られないことや、マンモグラフィと超音波検診は相補的であり、併用が偽陰性対策として有効であること、また、プレスト・アウェアネスについては、自己触診とは一線を画す概念で「生活習慣」であり、がんから身を守るためのより基本的な方法として普及啓発が求められるとのことでした。

### 《子宮がん検診セミナー》

令和4年3月15日（火）～3月29日（火）の期間にWEBで開催し、約100名から参加いただきました。

講演Ⅰでは「子宮頸がんの1次予防（HPVワクチン）と2次予防（検診）」と題し、新潟大学医学部産科婦人科学教室 主任教授 榎本 隆之 先生から、講演Ⅱでは「新潟県における子宮がん検診の状況と対策」と題し、新潟南病院 産婦人科部長 児玉 省二 先生に、それぞれご講演をいただきました。

榎本先生からは、子宮頸がんとHPVについて、HPV感染しても90%の女性は2年後には陰性となるが、高リスクHPVに持続感染していると発がんリスクが高くなることや、国内でHPVワクチン接種の積極的勧奨の中止となった経緯やその後の国内でのHPVワクチン有効性の研究についてお話いただきました。令和4年4月からHPVワクチンの積極的勧奨が再開されていますが、今後の課題として、接種対象者の接種率の増加、接種後の有害事象の診療体制の確立、接種率が落ちた世代のcatchup接種、2回接種、9価ワクチン、男子への接種等を挙げられていました。

児玉先生には、新潟県の子宮がん検診の状況として、検診受診者数の推移や、受診者の年齢構成と受診歴、がん発見の年次推移や、今後の検診についてお話いただきました。

対策型検診のがん発見は、30～50歳の罹患数の多い年齢で、初診の方の参加が重要であること、精検受診率は2年間追跡し、未受診・未把握者を少なくすること、個別受診勧奨によるシステムへの移行が望まれる等とのことでした。

### 表紙画説明



大三角草（おおみすみそう）  
キンポウゲ科 ミスミソウ属

ミスミソウの1品種で、全体が大きい。葉は幅5～10cmあり、先は鈍頭となる。花びら状の萼片は8～10mmある。花の色は白、紫、紅、藍などの変化に富んでいる。花期：3～4月。日本海側に分布。

雪割草の名で新潟県の草花に指定されました。ただ、「ユキワリソウ」の名の花は別にありますし、福寿草のことを雪割草と呼ぶところもあります。

私は、山野草を主に描いていますが、植物の世界は無知で、この花の仲間にミスミソウ、スハマソウがありますが、違いがわかりません。近くの雪どけが進んだ山肌にもこの花が咲いていました。色は白（少しピンクがかった）で、原種だと教えていただき感激でした。

（表紙画 野の花館 外山 康雄 氏）

表紙題字 書家 大矢大拙 氏